

# 日本語の「動物名」による

## ことわざ的慣用表現の一考察

頼錦雀

### 一、はじめに

#### 1. 主旨

日本語には、「鳶が鷹を生む」、「犬と猿の仲」、「えびで鯛を釣る」、「虹蜂取らず」のような、鳥、獣、魚、虫などの動物の名前によることわざ的慣用表現①がずいぶんある。

では、これらの慣用表現を使う日本人の動物観は何か。また、そのことわざにはどんなものがあるか。それから、日本語の動物名による慣用表現を中国語のそれと対照比較したら、どんな結果がでるか。以上のことを究明するのは、本文の主旨である。

#### 2. 動物名の読み方

本文に入る前に、まず、慣用表現に出た動物名の読み方について考察したい。

藤堂明保氏は『漢語と日本語』で、動物のうち、馬、豹、象、獅子など、日本にはおそらく住んでいなかった動物、あるいは、

ほとんど知られていなかった動物の名を、昔の日本人が仏典や漢籍を通じて初めて教えられたゆえに、今日でも漢語で呼んでいる。鳥の名にも、孔雀、鸚鵡のように、漢語のままで呼ばれるものが多い。魚の名は、珍しく固有の日本語が固く守られて、ほとんど漢語の介入を許さないと述べている。虫については、はっきり述べていないが、本にあげた蟾蜍、蚰蜒、蠅、螻蛄などの例は、すべて固有の日本語で呼ばれるのである②。

そういえば、慣用表現に出た動物名の読み方はすべて前に述べた通りであろうかというところ、そうでもないようである。筆者は『ことわざと名言辞典』、『暮らしの中の国語慣用句辞典』で考察したが、結果は表一・四である。

表一・四では、訓読みで呼ばれるものは音読みに読まれることがあるということが分る。が、これはすべて複合語の場合である、例えば、「窮鳥」、「犬馬」、「水魚の交わり」、「蜂起」など。複合語でない場合は、やはり藤堂氏の述べたとおりである。

国語学大辞典では、内容によって、ことわざを(1)批評、風刺をするもの、(2)教訓を与えるもの、(3)知識・真理を伝えるもの、(4)話の興を添えるものという四種類に分けている③。筆者はそれを参考にして、動物名による慣用表現を次のように分類したい。

## 二、内容による分類

	訓読み	音読み
鳥	16	3
鶏	4	6
鴨	4	0
雁	2	0
烏	7	1
鷹	7	0
鶇	2	0
鳶	2	0
鶴	5	1
鴛鴦	0	1
雀	3	4
鷺	2	0
鳩	2	1
鸚鵡	0	2
鶯	1	0

表二：鳥

	訓読み	音読み
犬	54	3
猪	0	3
兔	4	5
牛	13	8
馬	0	37
狐	5	0
狸	4	0
猿	9	1
鹿	7	0
獅子	0	8
象	0	3
虎	17	7
狼	4	0
猫	18	0
鼠	9	2
羊	2	5
豹	0	2
貉	1	0
豚	4	0
龍	0	7
麒麟	0	2

表一：獣と空想上の動物

1. 人を批評、風刺するもの
  2. 人生の教訓・真理を与えるもの
  3. 生活の知識を伝えるもの
  4. 物事のようにすを比喻で表すもの
- 右の分類で、筆者の集めた標本を分類すると、次のような結果になる（表五、表八）。

	訓読み	音読み
虫	12	0
蜂	6	1
蟻	14	0
蠅	2	1
蚊	3	0
蟬	2	1
蛇	4	5
蜘蛛	3	0
蚯蚓	2	0
胡蝶	0	1

表四：虫

	順読み	音読み
魚	20	7
鯛	4	0
鰯	2	0
鯨	1	0
鯉	3	0
鰻	1	0
蝦	1	0
蛙	6	1
亀	1	1
水母	1	0

表三：魚

	批風 評刺	教眞 訓理	生知 活識	比形 喻容
鳥	2	10	0	7
鷄	2	2	0	6
鴨	1	0	0	3
雁	1	0	0	1
烏	3	2	0	3
鷹	2	3	2	0
鵠	2	0	0	0
鳶	1	0	0	1
鶴	2	0	1	3
鴛鴦	0	0	0	1
雀	3	1	0	3
鷺	2	0	0	0
鳩	0	0	0	3
鸚鵡	2	0	0	0
鶯	0	0	0	1
合計	23	18	3	32

表 六

	批風 評刺	教眞 訓理	生知 活識	比形 喻容
犬	36	11	3	7
猪	1	0	0	2
兔	4	1	0	4
牛	12	2	0	7
馬	20	8	1	8
狐	2	1	0	2
狸	3	0	0	1
猿	9	0	0	1
鹿	1	0	0	6
獅子	2	0	1	5
象	1	0	0	2
虎	8	4	0	12
狼	1	1	0	1
猫	6	4	1	7
鼠	5	1	2	3
羊	0	4	0	3
豹	0	0	0	2
貉	1	0	0	0
豚	4	0	0	0
龍	2	0	0	5
麒麟	2	0	0	0
合計	120	37	8	78

表 五

	批風 評刺	教眞 訓理	生知 活識	比形 喻容
虫	4	2	0	6
蜂	1	0	0	6
蟻	0	5	1	8
蠅	0	2	0	1
蚊	0	0	0	3
蟬	0	0	0	3
蛇	3	1	2	3
蜘蛛	0	0	2	1
蚯蚓	1	0	0	1
胡蝶	0	0	0	1
合計	9	10	5	33

表 八

	批風 評刺	教眞 訓理	生知 活識	比形 喻容
魚	10	7	0	10
鯛	0	2	0	2
鰯	0	2	0	0
鯨	0	0	0	1
鯉	0	1	0	2
鰻	0	0	0	1
蝦	0	0	0	1
蛙	3	0	0	4
龜	0	0	0	2
水母	0	0	0	1
合計	13	12	0	24

表 七

表五へ表八では、次のことが分る。

1 獣の名前による慣用表現では、人を批評したり、風刺したりするものが、半分を占めていて、一番多い。それに次いで多いのは三十パーセントを占めている、物事のよろずを形容するものである。

2 鳥および鳥の名前による慣用表現では、一番数が多いのは物事の形容に使われるものである。三十九パーセント強を占めている。次は批評・風刺に使われるものであり、二十八パーセントを占めている。

3 魚および魚の名前による慣用表現では、鳥と同じように、物事の様子を比喻で形容するものが一番多く、半分を占めている。それから、批評・風刺をするものと教訓・真理を与えるものは、それぞれ四分の一を占めている。生活知識を伝えるものは一つもない。

4 虫および虫の名前による慣用表現では、一番多いのは物事の様子を形容するものである。この点では、鳥と魚と同じである。次は、教訓・真理を与えるものである。

右を合わせて見ると、動物名による慣用表現では、人の批評・風刺をするものと、物事の形容をするものが一番多い。それぞれ全部の三十八パーセントを占めている。一番少ないのは、生活の知識を伝えるものである。僅か六パーセントしか占めていない。

### 三、慣用表現から見る日本人の動物観

慣用表現に出た動物はいろいろあるが、ここでは、(1)獣と空想上の動物・(2)鳥・(3)魚・(4)虫・の四種類に分けて述べたい。

#### 1. 獣と空想上の動物

##### (1) 犬

犬と言えば、すぐ吠えることが連想される。例えば、一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う 吠える犬は恐くない 犬に吠えられるもの必ずしも盗人ならず 犬の遠吠え 月は犬の吠えるのを顧みない 吠えない犬と静かな流れは危険であるわが門では吠えぬ犬なし 蜀犬日に吠ゆ 犬の逃げ吠え

などがその表現である。そして、その吠える声から

犬猫の夫婦でにゃわん

というのがある。吠えるばかりでなく、犬はものをかむから、飼う犬に手をかまれる 黒犬にかまれて灰汁のたれかすに恐れる

という表現がある。次に連想されるのは、飼われるもの、使われるものということである。例えば、

犬になるなら大家の犬になれ 飼う犬に手をかまれる 金持ちの家にやせ犬なし 喪家の狗 尊客の前には狗をも叱せず 犬をつける

は、その連想からできた表現である。犬は右で述べたように番犬やスパイに使われるほかに、鷹狩りに用いられたようだ④。それで、犬と鷹とは身分が違ふとされた。これは次の慣用表現で分る。

犬も朋輩鷹も朋輩 犬と鷹 犬骨折って鷹の餌食

使われるものとして飼われるから、犬はどこにも見られる。

それがゆえに、転じて平凡なもの、つまらないもの、ばかという意味になった。例えば、

夫婦喧嘩は犬も食わぬ いぬが星をまもる 犬の川端歩き  
犬に伽羅聞かす 犬に小判 犬に念仏 犬に論語 犬の手  
も人の手 など。

それから、

犬の遠吠え わが門では吠えぬ犬なし 犬の長吠え いぬ  
の逃げ吠え

のように、犬は臆病者である。けれども、臆病者である犬にも、  
よく称讃される長所が一つある。それは、「犬は三年飼えば三  
年その恩を忘れぬ」という、恩を知ることである。

## (2) 猪

猪突猛進 猪突豨勇 猪武者

右の表現を見ても分るように、猪は、がむしゃらに早く走る  
ことが連想される。

## (3) 豚

豚はいのししを飼いならした家畜で、動作は猪と違って、ず  
いぶんのろい。日本語では、

豚に念仏 豚に真珠 豚の軽業 豚の木登り

などのように、ばかという意味で使われる。

## (4) 兔

兔はとても温順な動物だから、「兔もなぶれば食いつく」の  
ように、おとなしいものという意味がある。

人間はこのおとなしい兔を食べるから、「株を守り、兔を待

つ」のように、捕えられるものという意味もある。捕えられる  
とき、この温順な動物もやはり一所懸命に早く走って逃げよう  
とするので、

初めは処女のごとく、終わりは脱兔のごとし 烏兔匆匆  
のように、早く走るものという意味を表している。

## (5) 牛

牛も千里馬も千里 牛を馬に乗り換える 遅牛も淀早牛も  
淀 牛の歩み 牛歩戦術

右のように、牛といえは、日本人はすぐその動作ののろいこ  
とを連想するようである。歩くのがおそいが、農業社会ではと  
ても大切なものなので、

女さかしゅうして、牛を売り損う

の牛は、大事なものという意味を表す。

しかし、それに対して、怠け者、ばかというマイナスの評価  
の意味を表すものもある。

食ってすぐ寝ると牛になる 牛に対して琴を弾ず 牛驥同  
皁

がそれである。

## (6) 馬

古くから馬は乗り物にされるから、

駆け馬に鞭 南船北馬 馬に乗るとも口車に乗るな 馬には  
乗って見よ、人には添うて見よ

のように、「馬＝乗り馬」とも言える。乗り物から転じて使わ

れるものという意味にもなった、例えば

馬と馬子は考えが一致せぬ 犬馬の勞 千里の馬は常にあれども伯樂は常にはあらず

などがその例である。使われるものだから、卑しいものという意味が生じた。人を輕蔑して罵る時に使う「どこの馬の骨」がそれである。それから、馬はばかである。

馬の耳に念仏 馬耳東風

がその証拠である。しかし、それに対して、

老馬の知 老いたる馬は道を忘れず

の馬は、知恵者という意味を表すのである。

#### (7) 狐と狸

昔話では、狐と狸はよく人間のまねをしたり、人間やほかのものにばけたりする。そのせいか、中国人<sup>⑥</sup>と同じように日本人は狐と狸をずるいものとしている<sup>⑦</sup>。例えば、

狐と狸のばかしあい 狸寝入り 狐につままれる 狸じじい 狸ばばあ

などがその表現である。それから、狐と狸といったら、すぐ連想されるのは、その毛皮のことである。例えば、

千羊の皮は一狐にしかず 取らぬ狸の皮算用

#### (8) 猿

猿は、形が人間と似ているから、人間になろうとするようによく人間のまねをする。しかし、猿は何といっても猿だから、人間にはなれない。それで、猿といったら、

金の指輪をはめても猿は猿 猿が冠をかぶる 猿の毛は人間より三本少ない 猿の人まね

というように、その人まねの根性が思われる。これが転じて、ばかという意味が生じた。前にあげた例のほかに、

猿の尻笑い

もそれである。次に、猿の手が長いこと、木登りが上手なことも連想される。

猿臂を伸ばす 猿も木から落ちる

#### (9) 鹿

鹿は、兔と同じように獵師たちに狙われるものだから、捕えられるものという意味によく使われる、例えば、

鹿を追う獵師山を見ず 中原の鹿 中原に鹿を逐う 秋の鹿は笛による 女の足駄にて造れる笛には秋の鹿よる など。

それから、鹿を馬に間違えたことで、

鹿を指して馬となす 馬鹿

などのものが生じた<sup>⑧</sup>。

#### (10) 獅子

獅子は百獸の王だから、古くから強いものとされる。

獅子奮迅 獅子に鱗 獅子は兔を打つに全力を用う 獅子の

齒がみ 獅子の分け前

がそれである。百獸の王だから、その吠える声もとても大きいことから、「獅子吼」という雄弁を形容することばができた。

## (11) 象

昔、日本には象がなかったせい、象による慣用表現はわりあい少ない。筆者の標本に出たのは三つしかない。

女の髪の毛には大象もつながら 群盲象を評す 象牙の塔  
前の二つは、象の大きいこという発想からできた表現である。  
「象牙の塔」は、現実逃避という意味で、これはフランス語から伝えられたものである。

## (12) 虎

日本語では、虎は百獣の王の獅子よりよく使われているようである。筆者の標本に出た、虎による表現は、獅子のそれより15例多い。

虎は、とても力が強くて危険だから、強いもの、危険なものという意味がある。例えば、

両虎共に戦わばその勢い俱には生きず 虎の威を借る狐  
虎は死して皮を留め人は死して名を残す 苛政虎よりも猛し  
騎虎の勢い 虎穴に入らざるば虎児を得ず 虎口をのがれて竜穴に入る 虎視耽耽 前門に虎を拒ぎて後門に狼をすすむ 虎狼より人口 虎を養いて自ら災いをのこす 暴虎馮河 など

人間がよっぱらうと、その行いが虎のように乱暴になるので、日本語では、よっぱらうことを「虎になる」という。

## (12) 狼

中国語には、狼が虎と同じように、危険なもの、いやなもの

という意味で使われる慣用表現が多い。それに対して、日本語には、その例が少ないようである。

前門に虎を拒ぎて後門に狼をすすむ 前門の虎後門の狼

一匹狼

「一匹狼」は、群を離れて一頭だけで生活している狼のことである。

## (13) 猫

日本語には、猫による慣用表現が少なくない。まず、猫の魚を食べることと、鼠をとることが連想される。

ねこの首に鈴をかける 鳴かない猫は鼠をとる 猫が手袋をすれば鼠をとらぬ 皿なめた猫が科を負う 猫に鯉節の番をさせる 猫を追うより皿を引け 猫の精進

それから、「猫の額」、「猫の目」など、その体付きに関するものあれば、「猫ばば」、「猫被り」、「猫の暑いのは土用の三日だけ」、「猫撫で声」のような、物を隠す、寒がり、媚びる、という猫の本性に関するものもある。

## (14) 鼠

鼠は、体が小さいし、それに猫がこわいので、よく小さいものの、弱い者に例えられる、例えば、

窮鼠猫をかむ 首鼠兩端 大山鳴動して鼠一匹 鼠の尻尾

も錐のさや 鼠は社によりて貴し 鼠が塩を引く

など。それから、「鼠がいなくなると大事になる」という、鼠の特別な感覚に関するものもある。

(15) 羊

羊は古くから食べ物とされるから、捕えられるものという意味に使われる。

多岐亡羊 亡羊の嘆 屠所の羊

などがそれである。それから、「迷える羊」のように、弱いもののたとえにもなる。

(16) 豹

日本にはもともと豹がなかったから、それによる、純日本的な慣用表現はない。ただ、中国語から伝えられたものがある。

君子は豹変す 一斑を見て全豹をトす

(17) 貉

筆者の標本に出た、貉による慣用表現は一つしかない、しかも、それは、豹と同じように、中国語から伝えられたことわざである。

同じ穴の貉

の「貉」は悪党を指している。

(18) 竜

竜は、中国から日本に伝えられた、空想上の動物だから、日本語における、竜による慣用表現は、殆ど中国語から借用したものである。

竜頭蛇尾 竜のひげをなび虎の尾をふむ 竜の鬚を蟻が狙う

右の竜は、強いものという意味を表す。

(19) 麒麟

麒麟も中国から日本に伝えられた想像上の動物である。

麒麟児 麒麟の一角

のように、珍しいもの、すぐれているものとされている。

2. 鳥

(1) 鶏

鶏は時を知らせる役に立つから、啼くことが連想される。

例えば、

鶏鳴狗盗 鶏犬相聞 牝鶏晨す

など。それから、ほかの動物と比べると、鶏はあまり大したものではないから、

鶏口となるとも牛後となるなけれ 鶏も自分の糞の上では王である 鶏を割くにいずくんぞ牛刀を用いんや

のように、小さいもの、弱いものという意味に使われる。また、「鶏冠に来る」のように、怒ると鶏冠があかくなることも連想される。

(2) 鴨

日本人は鴨といえば、すぐそのおいしさを連想するようである。これは次の例で分るのである。

いとこ同土は鴨の味 鴨はねぎをしょってくる

鄰りの貧乏鴨の味

それから、足の短いことも連想される。



鴨の脛短しといえどもこれを継がば則憂えん

(3) 鳥

鳥には、まず捕えられるものという意味がある、例えば、

一石二鳥 雁は八百矢は三文

など。それから、すぐれたものという意味で使われることもある。次はその例である。

鳥なき里のこうもり

鳥の王である鷹は、

犬も朋輩鷹も朋輩 鷹は飢えても穂を摘まず 鳶が鷹を生

む 能ある鷹は爪をかくす

のように、賢人、有能な者という意味で使われる。また、

一富士二鷹三茄子

のように、吉祥物とされる。鷹のもう一つ連想されるのは、その鋭い目のことである。

鵠の目鷹の目

鳶は、「鳶が鷹を生む」を見て分るが、平凡ものとされる。

また、「鳶に油揚げをさらわれる」のように、鳶は盗人という意味で使われる。

鵠は、「鵠は千年」というように、鵠はとても長生のできる鳥である。それに、「鵠の一声」、「鶏群の一鵠」、「塵塚に鵠」などのように、すぐれたものとされる。昔話の「鵠の恩返

し」に出た美しい少女は、日本人の鵠に対するイメージの具象化されたものと言えよう。

鴛鴦といったら、何といってもその夫婦仲のよいことが思出される。だから、よく「鴛鴦の契り」で夫婦の仲のよいことを形容する。

雀は形が小さいから、小さいもの、弱者という意味で使われる、例えば、「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」、「雀の千声鵠の一声」、「闘雀人を恐れず」など。それから、よくとびはねることも連想される。「欣喜雀躍」、「雀百まで踊り忘れず」がそれである。

日本人は驚というと、すぐ長居することを連想するようである。というのは、標本に出た「客と白鷺は立ったが見事」、「長居する鷺ひき目にあらう」は、二つとも長居に関係があるものである。

鳩は、「鳩首凝議」から考えれば、群集の鳥である。また、礼儀正しい鳥と思われるようである。これは、「鳩に三枝の礼あり」で分かる。

日本人はあまり鳥が好きでないようである。「鳥鳴きが悪いと人が死ぬ」、「鳥合の衆」、「鳥は百度洗っても鷺にはならぬ」のように、いつもよくないものという意味で使われる。「

鳥が鵜のまね」、「鳥を鵜に使う」なども同じである。

鵜といえ、日本人はすぐその目つきと、水にくぐって魚をとることを連想するようである。例えば、「鵜の目鷹の目」、「鵜のまねする鳥水に溺れる」など。

### 3. 魚

魚は水に住むものだから、よく水と一緒に連想される。

水に放たれた魚のように、魚が水を得る 吞舟の魚も水をしえば蟻に制せらる 魚心あれば水心 水魚の交わり  
水清ければ魚住まず

また、魚は人間の食べ物なので、

魚は釣りで捕えられ人は甘言で捕えられる 魚を得るは網の目によれど衆目の力なければこれを得ること難し 釣り落とした魚は大きい 逃ぐる魚を恵比寿に参らす 木によつて魚を求む 網吞舟の魚を漏らす 網にかかった魚

組上の魚

などのように、取られるものという意味を表わす。

「鰻の寝床」は、その体の形から細長いという意味が生じた。

魚のなかで 一番珍しいものだと思われているのは鯛である。  
だから

えびで鯛を釣る いわし網に鯛がかかる くさつても鯛などの鯛は、大切なものという意味である。

それに対して、いわしは小さいもの、弱いものという意味に使われる。例えば、

家の鯛より隣の鯛 いわしの頭より鯛の尻尾 いわしの頭も信心から など。

鯨といったら、すぐその大きさが連想される。中国語の「鯨吞蠶食」はその大きいことを言っているが、日本語の「一匹の鯨に七浦にぎわう」も同じである。

蝦は体が小さいので、「えびで鯛を釣る」のように、つまり小さいもの、小さいものという意味がある。

蛙は、日本語では平凡なものという意味である。例えば、「井の中の蛙大海を知らず」も「蛙の子は蛙」もそれである。又、「おたまじゃくしが蛙になる」のように憎らしいものという意味もある。

亀はとても長生する動物だから、長寿の意味として使われる。「鶴は千年亀は万年」、「亀の甲より年の功」は二つともその意味から出た表現である。亀の甲は占の道具に使われるから、「亀鑑」で手本、模範を表すこともある。

### 4. 虫

日本語には、「虫」による慣用表現が多い。虫は、形がほとんど小さいので、転じて弱者という意味が生じた。例えば、「一寸の虫にも五分の魂」。虫はもともと多かれ少なかれ有害な

ものだから、よくないものという意味がある、「大の虫を生じて小の虫を殺せ」、「黙り虫壁を通り」がそんな表現である。これから転じて、「泣き虫」、「点取り虫」のように、普通の人と何か変った人をさすこともある。また虫は、気持や考え方を左右するものを示す、「腹の虫が承知せぬ」、「虫の居所が悪い」がそれである。

蜂といえば、さすことがすぐ連想される。蚊もさすことが連想されるけれども、蜂はどこわくくない。というのは、蜂の針に毒を含んでいるからである。もし、運がよくなって蜂にさされたら、それはたいへんなことになる。よって、「泣き面に蜂」というように、蜂には災いの意味がある。それから、「蜂を払う」のような、厭な物を表す表現もある。蜂は団体生活を営むから、群がってくることも連想される、例えば「蜂起する」、「蜂のごとく起こる」、「蜂の巣をつついたよう」などはその連想から出来た表現である。それらの「蜂」は、多数という意味を表す。また、体が小さいから、「蜂の頭」は何にも役立たないものを表す。

蟻は、蜂よりも体が小さいから、小さいものという意味でよく用いられる。「ありの穴から堤がくずれる」、「ありの思いも天に上る」、「ありのたけ」、「ありの這い出る所」、「ありの髭」などはそれである。また、蜂と同じように団体生活をするから、「ありの熊野参り」、「ありの門渡り」、「ありの物参り」、「甘いものに蟻がつく」のように、多数という意味

がある。

蠅は人体に有害な細菌を持つてくるので、いつもじゃまものとされている、例えば、「人のことより自分の頭の蠅を追え」。また、体が小さいものだから、「蠅頭」はわずかの利益にたてられる。

蚊も体が小さいから、やはり小さいものという意味で用いられる。「蚊の涙」は、非常にわずかなもの（こと）のたとえである。

蟬といったら、その鳴くこととぬけがらのことが連想される、例えば、「蛙鳴蟬噪」、「寒蟬枯木を抱く」、「空蟬の世」など。

蛇には毒のないものがあるにもかかわらず、殆どの人は蛇と聞くとこわくなる。というのは、かまれたら死ぬかもしれないからである。ゆえに、蛇にはこわいものという意味がある。「蛇は寸にして人を吞む」、「めくら蛇に怖じず」、「藪をつついて蛇を出す」がその例である。また、何ものむことから、欲張りという意味が生じた。例えば、「蛇は口のさけるのを知らず」がそれである。

蜘蛛に関する慣用表現はわりあい少ない。「朝蜘蛛は縁起がよい」、「夕蜘蛛は縁起が悪い」のように、日本人は蜘蛛を縁

起とむすびつけている。それから「くもの子を散らすように」と、くもの子で多数を表す。

骨のない蚯蚓は、日本語では悪筆に結びつけられている、例えば、標本に出た「蚯蚓のぬたくったよう」、「蚯蚓書き」の例は、二つともそれである。

蝶に関する慣用表現は、標本に出たのがただ一つある。しかも、それは 中国語から伝えられた、はかない人生をたとえる「胡蝶の夢」である。

#### 四、中国語と対照比較して

日本語の動物名による慣用表現を、中国語のそれと対照比較すると、次のように分けられる。

I、中国語と同じ表現、同じ意味を有するもの

一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う 狡兔死して走狗煮らる  
牛耳をとる 鶏口となるとも牛後となるなけれ 一石二鳥  
鶏群の一鶴 井の中の蛙大海を知らず 木によって魚を求む  
亀鑑 蜂起する 千丈の堤も蟻穴より潰いゆ 蛇足など

この中日両語で表現・意味が同じものは、また出自で次のように分類できる。

(1) 中国語から日本語に伝えられたもの

鶏鳴狗盗 獅子は兔をうつに全力を用う 虎視眈眈 天にありては比翼の鳥、地にありては連理の枝

などは、すべて中国語から日本語に借用されたものである。Iに属する慣用表現のほとんどは、これである。

(2) 同じ外国語から中日両国語に伝えられたもの

象牙の塔(中：象牙塔)——フランス  
群盲象を評す(中：群盲摸象)——涅槃經  
迷える羊(中：迷途羔羊)——新約聖書

筆者の標本に出た(2)に属するものは、右の三例だけである。

II、中国語と意味が同じだが、表現が違ったもの

中国語と意味が同じだが、表現が違った、日本語における動物名の慣用表現には、次のようなものがある。

(1) 同じ動物名を用いるもの

意馬心猿(中：心猿意馬)  
烏兔匆匆(中：烏飛兔走)  
馬の耳に念仏(中：馬耳東風)  
魚目燕石(中：魚目混珠)

(2) 違った動物名を用いるもの

兔もなぶれば食いつく(中：狗急跳牆)  
いぬに小判(中：對牛彈琴)  
食ってすぐ寝ると牛になる(中：像猪一樣吃飽了就睡)  
獅子にひれ(中：如虎添翼)  
鵜の目鷹の目(中：鷹鼻鵜眼)  
鳶が鷹を生む(中：烏鴉巢裏出鳳凰)  
鵜のまねする鳥、水に溺れる(中：畫虎不成反類犬)

鳥なき里の蝙蝠（中：山中無老虎、猴子稱大王）  
腐っても鯛（中：瘦死駱駝比馬大）  
えびで鯛を釣る（中：將蝦釣鰲。拋磚引玉）  
蛙の子は蛙（中：龍生龍、鳳生鳳、老鼠兒子會打洞。有其父必有其子）  
虻蜂取らず（中：雞飛蛋打）

(3)

中国語では動物名を用いないもの  
獅子身中の虫（中：恩將仇報。禍患内生）  
猿も木から落ちる（中：智者千慮、必有一失）  
犬と猿の仲（中：水火不容）  
取らぬ狸の皮算用（中：打如意算盤）  
夫婦喧嘩は犬も食わぬ（中：清官難斷家務事）  
亀の甲より年の功（中：薑是老的辣）  
蛙の面に水（中：若無其事）  
泣き面に蜂（中：禍不單行）  
面面の蜂を払う（中：自掃門前雪）

Ⅲ、中国語にないもの

秋の鹿は笛による  
夢と鷹は合わせがら  
一富士二鷹三茄子●  
猫も杓子

猫被り

牛に引かれて善光寺参り

中国語を母国語とする人にとっては、Ⅰはもちろん理解できるものである。Ⅱも殆んど類推可能のものである。そして、Ⅲは殆んど類推不可能のものである。表で表すと、つぎのようになる（表九・十二）。

表九・表十二を見ると、次のことが分かる。

- (1) 獣の名によるものには、中国語と同じ表現を有するものが三十一パーセントある。類推可能のものを合わせると、八十八パーセントが中国人に理解できるものである。
  - (2) 鳥の名によるものには、中国語と同じ表現のものは三分の一で、類推可能のものは六十二パーセントを占めている。
  - (3) 魚の名によるものには、中国語と同表現のものは二十八パーセントある。類推可能のものは六十七パーセントある。
  - (4) 虫の名によるものには、中国人の理解できるのが九十パーセント近くある。
- 全体的に見れば、中国人に理解しにくい、日本語の動物名による慣用表現は、十パーセント弱しかない。

	同表現 のもの	類推可能 なもの	類推不可 能なもの
鳥	8	11	0
鶏	7	2	1
鴨	1	3	0
雁	0	1	1
烏	2	6	0
鷹	0	5	2
鵜	0	2	0
鳶	0	2	0
鶴	3	3	0
鴛鴦	0	1	0
雀	3	4	0
鷺	0	2	0
鳩	0	3	0
鸚鵡	1	1	0
鶯	0	1	0
合計	25	47	4

表 十

	同表現 のもの	類推可能 のもの	類推不可 能なもの
犬	5	35	17
猪	1	1	1
兔	4	5	0
牛	6	13	2
馬	17	18	2
狐	1	3	1
狸	0	4	0
猿	1	8	1
鹿	3	2	2
獅子	2	6	0
象	2	1	0
虎	18	6	0
狼	2	1	1
猫	0	16	2
鼠	4	7	0
羊	5	2	0
豹	2	0	0
貉	1	0	0
豚	0	3	1
龍	4	3	0
麒麟	0	2	0
合計	78	136	30

表 九

	同表現 のもの	類推可能 のもの	類推不可 能なもの
虫	0	11	1
蜂	1	5	1
蟻	2	11	1
蠅	1	1	1
蚊	0	3	0
蟬	2	0	1
蛇	4	4	1
蜘蛛	0	3	0
蚯蚓	0	2	0
胡蝶	1	0	0
合計	11	40	6

表 十二

	同表現 のもの	類推可能 のもの	類推不可 能なもの
魚	11	15	1
鯛	0	4	0
鰯	0	2	0
鯨	0	1	0
鯉	0	2	1
鰻	0	1	0
蝦	0	1	0
蛙	2	5	0
亀	1	1	0
水母	0	1	0
合計	14	33	2

表 十一

また、中国語と同じ表現を有するものを、二の分類で見ると、次のようである。(表十三)

		批評	風刺	教訓	真理	生活	知識	比喩	形容	計
獸	犬	4						1		5
	猪							1		1
	兔	3						1		4
	牛	4						2		6
	馬	6		5				6		17
	狐	1								1
	猿	1								1
	鹿							3		3
	獅子	1						1		2
	象	1						1		2
	虎	6		4				8		18
	狼							2		
	鼠	2		1				1		4
	羊	1		4						5
	豹							2		2
	貉	1								1
	龍	1						3		4
鳥	鳥			4				4		8
	鶏	1		2				4		7
	鴨	1								1
	烏	1		1						2
	鶴	1				1		1		3
	雀	1						2		3
	鸚鵡	1								1
魚	魚	2		2				7		11
	蛙	1						1		2
	亀							1		1
虫	蜂							1		1
	蟻			2						2
	蠅							1		1
	蟬							2		2
	蛇					2		2		4
	胡蝶							1		1
合計		41		25		3		59		128
比率(%)		32.0		19.5		2.3		46.1		

表 十 三

三つの種類に分けられる。

(1) 中国語とほぼ同じもの

表十三では、一番多いのは「虎」によるもので、次は「馬」分類では、一番多いのは半分近く占めている、物事の様子を表すものであり、次は、三分の一を占めている、人を批評したり風刺したりするものである。人生の教訓や真理を与えるものは五分の一ある。生活の知識を教えるものは、とりわけ少なく、二パーセントしかない。

次は、日本語を動物観から中国語⑧と対照比較すると、

蜂	魚	鶏	貉	兔	猪	馬	狐	狸	鹿	獅子	象	虎	狼	羊	豹
蟻	鯨	鴨	竜	猪	馬	麒麟	牛								
蠅	蝦	鳥	麒麟												
蚊	蛙	鶴	鴛鴦												
蛇	亀	鴛鴦	雀												
蟬	鯉	鴛鴦	鳩												
胡蝶		雁	鳶												

(2) 中国語と少し違ったもの

犬 豚 猿 猫 鼠

鳥 鷹

虫

(3) 中国語の資料に例語が見つからない

鷺 鵪

鰻 鯛 鰯 水母

蜘蛛 蚯蚓

(2) には、次のようなものがある。

犬：「犬と鷹」は上と下の意味だが、中国語の「鷹犬」は人の手先という意味である。

猫：中国語には、猫の体付きに関するものが見つからないようである。

鼠：「鼠がいなくなると火事になる」と同じ表現は、中国語には見つからないようである。

鳥：「鶉のまねする鳥水に溺れる」は、中国語では「畫虎不成反類犬、東施效顰」という。

虫：「点取り虫」、「黙り虫壁を通り」などと同じような表現は、中国語には見つからないようである。

豚：豚の例語から見た連想——ばかをさすことは、中国語にもある、例えば「笨猪」。その外に、「像猪一樣吃饱了就睡」の猪は、怠け者を示す。これと同じ意味を持つ日本語の例は、筆者の標本には見つからない。

## 五、むすび

以上いろいろ考察してきたことを次のようにまとめることができる。

- 1 動物名による慣用表現の中で、獣によるものが一番多く、半分以上を占めている。
- 2 内容による分類では、物事の形容をするものと、人を批評、風刺するものが多い、それぞれ全体の三十八パーセントを占めている。一番少ないのは生活の知識を伝えるものである。
- 3 動物からの連想は、動物によって違うが、その殆どはその動物の本性か体の形、或いは習性からきたものである。
- 4 日本語の動物名による慣用表現は、九十パーセントが中国人に理解できるものである。その中で一番多いのは、虎による表現である。
- 5 内容的分類から見ると、中国人に理解できる、日本語の動物名による表現では、半分は物事の様子を示すものである。
- 6 動物観から見る場合、七十パーセントが中国語から見た中国人のそれと同じである。

### 注

- 1 以下は「ことわざ的」を略して、「慣用表現」だけ呼ぶ。
- 2 『漢語と日本人』ペ二二八―二三〇。



- 3 『国語学大辞典』「ことわざ」項。
- 4 『徒然草』一七四段。
- 5 「頽廢的唯美戀情——狐和狸在傳奇故事裡的悲鳴」を参照。
- 6 昔話「かちかち山」、「文福茶釜」を参照。
- 7 『日本国語大辞典』「馬鹿」項による。
- 8 中国語の方は、『中文辞源』、『中国成語辭典』、『國語日報辭典』をもとにした。
- 9 「猪」は中国語では「山猪」、「野猪」という。

## 参考文献

- 『漢語と日本語』 藤堂明保 秀英出版 一九六九
- 『語源博物誌』 山中襄太 大修館 一九七六
- 『語源十二支物語』 山中襄太 大修館 一九七四
- 『日本語の発想』 白石大二 東京堂 一九六一
- 「日中のことわざ的慣用表現について」『日本語教育41号』  
日本語教育学会 一九八〇
- 『イラストことわざ辞典』 大山治義 学習研究社
- 『国語慣用句辞典』 吉田精一他 集英社 一九七五
- 『ことわざと名言辞典』 野本米吉 法学書院 一九七五
- 『小学生のことわざ辞典』 大山治義 学習研究社
- 『日本国語大辞典』 金田一京助 小学館 一九七二
- 『日本童話宝玉選』 佐藤春夫
- 『中文辭源』 藍燈編輯部 藍燈文化公司 一九七九
- 『中國成語辭典』 蘇宗健 作文出版社 一九七九

- 『國語日報辭典』 何容 國語日報社 一九八一
- 『中国古典名言事典』 諸橋轍次 講談社 一九八三
- 『重編國語辭典』 教育部 台灣商務印書館 一九八一
- 「頽廢的唯美戀情——狐與狸在傳奇故事裡的悲鳴」  
(中國時報 一九八四年三月二十二日 人間) 張大春